

『てんとう虫』

バルコニーからなんとは無しに見下ろしていると、地上を歩き交う人たちが蟻んこのように見え、自分も蟻んこのように思えて、ふと旅に出たくなつた。一人旅なんて経験もないし、考えたこともないのに、どうしてそう感じたのか自分でもよく分からない。

部屋に戻り、戸に手を掛けると、てかてか黒く輝いてまん丸の、ブラウスのボタンのようなものが窓ガラスに張り付いていた。顔を近づけてよく見ると、てんとう虫だ。左右に赤黒い、本体の色のせいで目立たないけれど、見事に対称性を保持した幾何学模様が描かれている。

視界の焦点を窓ガラスからはるか遠くにずらすと、街並みが途切れたあたりの、家がぼつんぼつんと点在するあたりに、黄に色づいた畑が見える。

「お前の暮らす場所があつちのほうだろ」声を掛けると、まん丸の体のでっぺんのあたりで、細いヒゲのようなのものが小さく震えた。

「ここは十四階の部屋だ。何かにくつついてきてしまつたの、それとも自分で？」

電車を降りて改札を抜けると、そこは小さな待合所になつていて、旅を終えて帰路に着く人たちと、たつた今降り立った人たちとで一時ごつた返した。私はそうした人々の間を縫つて足早に外へ出る。駅前のロータリーの中央には、観光客には充分すぎるくらいのパスやハイヤーがたむろし、運転手たちがあちこちで談笑している。八年前に来たときには、確かあのあたりに丸い植え込みがあり、その縁に看板が立てられていたはずだけど。はつぴを着たおじさんたちに声を掛けられるのを避けるようにして、右手に見える商店街を指す。そこはどのパスもハイヤーもパチンコ台のはずれ玉のように吸い込ま

れていく。温泉場を目差す道筋の始まりなのだ。両側が
幟やらなにやらで飾り立てられていて、物語への入り口
のようにも見える。

商店街は一、二軒みやげ物店があるだけで、その続き
はどの町とも変わらない店が並び、日常的な町人達とす
れちがう。商店街の通りは直に尽き、突き当りを右に曲
がるとその場所はずぐに見つかつた。ほんの十メートル
足らずの一角だがコンクリの柱が並び、格闘技のリング
のように太いロープが四本張られている。柵の向こうは
深緑のスピードの形をした葉が密生し、今は忘れられた
存在の桜の木が数本あつて、その先に錆びたレールが伸
びている。

『あ、あんなどころにお花が』あの時、バスの窓から
私が見つけた。母もすぐに気が付いて、『あら、ほんと、
百合ね。誰が、・・・』と、そこで口ごもり、その旅行
の間ずっと私の胸にひっかかつた。『誰が、あそこに・・・』
なにか、それとも『誰が、あそこで・・・』なのか。

ちようど真ん中あたりにある柱に、竹を輪切りにした
一輪挿しが麻ひもで結わきつけられ、ピンク色の花が一
輪活けられていた。私はロープに手を掛け、今乗つてき
た電車がまだ止まったままの駅の方と、目の前の一輪の
花とを交互に眺めた、『誰が・・・』なのか。そして何
気なく振り返ると、道の向こう側に小さな花屋があつて、
店先に老女がちよこんと椅子に腰掛けてこちらを見てい
た。私は道を渡り、店の前まで行つて小さく頭を下げた。

「こんにちわ。あのお花、おばさんが？」

「おばさんだなんて、お民ばあさんだよ」

お民さんは立ち上がると私の肩ほどしかなかく、目元
や口の周りの皺が笑つたせいで一段と深まつた。

「八年前にもありました、百合の花が」お民さんの笑顔
に思い切つて続けた「何かあつたのですか、あの場所です？」

「ほう、八年前に来られた、ご旅行で？」

「はい、両親と温泉場へ。バスでここを通りかかつて見つけたんです」

お民さんは私を案内するように奥へ誘い、上がり框に座布団を二つ並べると、奥へ入っていった。店の土間は片側に大きな観葉の鉢物が並び、反対側はひな壇になっていて、ポットに入れられた小さな花が並んでいる。切花は申し訳程度に、入り口の内と外のあたりで三、四個のバケツに入れられていた。

「バスの時間は？」

お民さんが麦茶を差し出しながら言った。

「特に予定のバスはありません、時間は大丈夫です」

私には時間はいくらもあつた。

「そう、それじゃ話そうかね」そう言ってお民さんは話し始めた。

「むかし昔の話だ」まるで子供に昔話でも聞かせるような調子で。

「あるとき男の子があの場合に姿を見せるようになってな、そう、十歳くらいだったか。来る日も来る日も『ポッポーきた、ポッポーきた』って鉄条網を揺するんだ、つんつるてんの寝巻きにすり減った大人の下駄っぱきで。誰もが思ったさ、あの子は電車が好きで、ああして毎日飽きもせずにやって来るんだって。わたしだってそう思ったさ、最初はな。子どもたちが、『ポッポーきた、ポッポーきたの電車小僧、電車小僧』って囃したりするもんだから、近所の人たちや通りがかりの人たちあみな余計にそう思ったさ。

子供って言やあ悪ガキもいてな、石をぶつつけたり、棒の先に馬糞くつつけて投げつけたりしてな。わたしや何度も箒もって追っ払ったものさ。男の子はな、何言われても何されても、言い返さないし仕返ししようなんてしないで、ただ表情変えずに振り返るだけさ。一度なあ、まったく情け無いことにうちの倅が混じつたことがあ

つてな、わたしやもう本気で怒ったよ。胸ぐら掴んで壁に押し付けて『そんなことする子はもう母ちゃんの子じやねえ』って。倅が大泣きするのを他の連中も見てて、その後はやらなくなつたさ、少なくともわたしの前ではな。

それでな、あるときふと思ひ当たつたんだよ、あの子は電車が好きでポッポー言ってるんじゃないってな。何しろ毎日必ずわたしやあの子を見てたんだから。あの子はな、機関車に向かつて叫んでるんだって。そうしたらピンときた。六年前の夏、七月二十八日に起きた事故のときの子だつて―

そこで一息入れると、お民さんは体を振るようにして柱時計を見上げた。

「時間は大丈夫なのかい？そう、それじゃ続けようかね。倅がお腹にいるときだった。その日の明けがた、機関車の警笛が忙しく鳴って、キッキーって車輪の軋む音がして、貨車がガチャガチャぶつかり合った。あわてて起き上がった部屋のを開けると、夜は明けていたけど靄つて何も見えない。そのうちに人の怒鳴り合うような声が始めた。これは何かあつたつてんであの柵のところへ行つたら、だいぶ先の方にぼんやりと機関車らしい黒いものが見えて、その近くで人がわさわさ動いていて、・・・。若い女が機関車に轢かれて死んでな、線路の脇で男の子が泣いてたということだ。あとから知れた機関士の話では、靄の中で急に黒い塊に気が付いて、警笛を鳴らしてブレーキを掛けたんだけど間に合わなかつた。それでもって、ぶつかる寸前に小さな塊が線路の外へ飛び出たんだと。それが男の子で、頭を打つてはいたけど命は助かった。あれから六年たつて、どういうきつかけかは知れないけど、あそこに姿を見せるようになってんだよ。

それで機関車を見つけては『ポッポーきた、ポッポー

きた』って叫ぶんだ、鉄条網を揺さぶってね。あの子は母ちゃんに教えようとしてるんだよ、ポッポきたよー、ポッポきたよーって、母ちゃんはもういないのに、必死に教えようとしてるんだよ」

お民さんの言葉がそこで詰まった。顔を覗くと、目の縁の皺に涙が滲み込んでいた。

「まあ確かにあの子は遅れがあつたさ。生まれついてものか事故で頭を打ったせいかは分からないけどね。でも、ひよつとするとあの子は心の中で、許して許してって叫んでたのかも知れないね、お母さんだけ死んでしまったことを・・・。私にや分かんない」

お民さんは両方の手の甲であふれそうになる涙をぬぐった。

「おお、ごめんよ、・・・。まだ、続くよ、いいかね？ 秋になって寒くなり始めても男の子は寝巻き一枚で素足のままで。気にはなつたけど仕方ない。ある日思い立ってな、声を掛けてみようかって、売れ残りの花を一本持つて。返事はなくて表情もなかったさ。けど、百合の花は受け取って両手でしっかり胸の前に抱いたんだよ。わたしや嬉しくなつて、それからというもの姿を見る度に花を持って行ったよ。そしてな、あるとき、あの子に感付かれないように後をつけてみたんだ。そこの大橋を渡つて、温泉場の方に折れてすぐのところを山の方へ上がつて行った。そしてお茶畑のはずれにぼつんとある一軒家に入つていった。傾きかけたような小さな家で、玄関戸の上の方の透きガラスから少しだけ中が見えてな、薄暗い裸電球が下がつて、お婆さんらしい姿がチラッと見えた。そして玄関横の縁側の前に小さな庭があつて、片隅に墓石が幾つか並んでな、一番手前の新しいのが、六年前に無くなつた母親のものに違いない、わたしがあげた花が何本か供えられてた。

それからしばらくして、あの子がぷつぷつりと姿を見せ

なくなつたんだよ。寒くなつてお婆さんに止められたか、具合でも悪くなつたかなつて思つた。二週間経つても来なかつた。とうとうわたしや氣になつて、男の子の家へ行つてみたのさ。家はひっそりしていて、でも裸電球は点いてた。嫌な予感がしてたんで勇氣が要つたけど、思い切つて墓のある庭の方を見たらさ、小さな墓石が一個増えてたんだよ、母親のに寄り添うようにしてね。もう涙が溢れて、恐る恐る近づいてみた。石には何も彫つてなかつたけど脇に木の札が添えてあつて、『杉村健太』としてあつた。わたしや手を合せておいおい泣きながら帰つてきたよ」

お民さんの話しが途切れた。そしてお民さんは脇にあつた手ぬぐいに手を伸ばした。

「お民さんは、その後もずっとお花をお供えしてあげてるんですね？健太さんに」

私の声も震えた。お民さんが収まるのを黙つて待とうと思つた。

「実はね、もう一つ話があるんだよ。ところで、あなたお名前は？そう、いいお名前ね。ミユウさんは初めてのお方なのにこんなに話して、でもあなたが素敵な娘さんだから話したくなるんだね。迷惑でなきや聞いとくれね。

あの七月二十八日、来年の夏でちょうど五十年になるけど、このちっぽけな町に大きな出来事が二つ重なつたんだよ。わたしの旦那は消防士でね、あの晩は宿直の当番だつただけけど、ちやうど帰れるはずの時間に事故の現場に駆けつけるはめになつてさ。一時間くらいしたころ、あそこの柵のところへ来て『水を頼む！』つてわたしを呼んだんだ。『飲む水？』つてきくと『ああ、薬缶で頼む』つて。水くらい駅舎へ行けばいいはずなのに、わたしの顔と子供が入つておなかを見たかつたんだね」お民さんは涙の乾いた目を少しだけ綻ばせた。

「『まだかかるの？』つて聞くと、『もう少しな』つて

言つて汗と疲れでだらしなくなつた顔でニヤつて笑つたの。それが旦那の顔を見る最後になつたの。あのとき菓缶に氷を入れてあげりやよかつたつて、旦那のことを思い出す度に氷のことが浮かぶし、氷を見る度にニヤつて笑つた顔が浮かぶのよ。あのとき冷蔵庫の氷が豆腐くらの大ききさしかなくてさ、姑に断るのが億劫だつたんだ。口をききたくないときだつたもんでね」

お民さんは私のことを忘れたかのようにしばらく店先の方へ目を向けていた。やがて我に返つて続けた。

「ミユウさんはもうお年頃のようにだから話すけどね、旦那が何故ニヤつてしたか。寝ずの番で朝帰つてくると、風呂呂に入つて朝ご飯食べて、そうすると姑がわたしに言うの、『タミエさんも少し休んだら』つて。それはわたしのためでなくて息子のため」

そう言うとお民さんは、私の方には顔を向けずに愉快そうに笑つた。不意を討たれて戸惑いながらも私も思わず笑つた。

「水だけの菓缶と湯飲みを旦那に渡してもの五分も経たないうちに半鐘が鳴り出したの。今でもよく覚えているけどとにかく尋常でない叩き方でさ、よつぽどのが起きたつてことが一瞬にして町中に響き渡つた。『ガン・ガン・ガン・ガン・ガン・ガン』つてね。これは川向こうという合図さ。大橋に出ると上流の岸近くに、ある日赤の建物から真つ赤な火が吹き出して、真つ黒な煙が渦を巻いてた。見る見るうちに火も煙も膨れていつて、人の力で消せるんだらうかつて恐ろしくなつた。あれはこの町の歴史に残る大火だつた。逃げ遅れた患者さんが二人亡くなり、消防士が一人死んだの。それがわたしのだ旦那。旦那は屈強さを自慢にしててね、『どんな火にも俺は負けない』なんてバカなことをいつも口にしてて、『おなかの赤ん坊が男の子だつたら俺が鍛えて俺みたいな立派な消防士に育てる』なんてことも繰り返して

言つてた。なんてことはない、あれほどの大火を経験したことがなかったってことなのね。町の人たちからは勿論、全国版の新聞でも英雄扱いされて、旦那のおかげで助かったという人が何人も御札を言いに来てくれたさ、花屋と知らずに花を持ってね。実際のところは地獄のような火の中でいっただけのことをしたんだか。確かに美談に仕立て上げられたおかげで、励ましにはなつたけど、あの人のばかげた一途さのおかげで倅は父無し子になつてしまつたし、その後縁の切れない姑と三人だけで暮らす羽目になつてしまつたのさ、何十年も」

お民さんと消防士さんの息子さんはやはり消防士になつたのだという。体は父親に似て頑丈だけど、頭の中味は幸いお民さんに似たそうだ。三人暮らしの最後の方、お姑さんが亡くなる少し前にお民さんに言つたのだそうだ、『もしいい人がいたら一緒にいらなうたら』。お民さんは一人部屋で腹の底から唸り声を上げて泣いたそうだ。そのときお民さんは五十になる少し前、人生を振り返らされたのだ。

私は一輪挿しの近くのロープにつかまりながら駅の構内を眺めた。昔は線路が五本も六本も敷かれ、その向こうには多くの倉庫が連なり、何十もの貨車を引いた機関車が日に数度出入りしたという。馬が荷車を引き、道のあちこちに馬の落とし物が平気で残されていて、私など歌でしか知らない蹄鉄を打つ鍛冶屋もあつたそうだ。大橋は何十年も昔の大台風で流され、立派な鉄の橋となつて生まれ変わったということだ。

最後にお民さんが語つたこと、『あの子は母親に生かされたのだ』。健太さんはあの時自分から母親を振り切つて飛び出したのではない、母親に投げ出されたのだ、『お前は生きろ』と。

お民さんはいつの時点で、どうしてそう思うようにな

ったかは語ろうとしなかった。私も聞かなかつた。お民さんはあの場所ですつと母子のことを思い巡らせて、そう考えたのだろう。私なんかには勿論何も分かりようはずがない、どういう事情で健太さんのお母さんは命を絶とうとしたのか、健太さんを道連れに。そして最後の瞬間に健太さんを生かしたのか。

振り返るとお民さんがこちらを見て笑っている。そうだよ、お民さん。お花屋さんの花には目を呉れなくても、この一輪にはみんな目を留めるんだ。お民さんは、日がな一日あそこにああして座って、行き交う人たちをニコニコしながら眺めては、あの人は一体どんな人生を歩んでるのかななんて、勝手に想像して楽しんでるのだろう。美優という娘のまだ駆け出しの人生はどう想像してるのかな。

私は、今もお民さんが暮らし、そしてかつては消防士さんが健太さんが、また健太さんのお母さんが生きたこの町に、もうしばらくは自分の身を置いていたい気分だ。大橋を歩いて渡ってみよう。山の方へ上がっても茶畑も健太さんの家も墓も既になくなっていくだろう。でも行ってみよと思う。そして気が済んだら駅前に戻り、あの物語の入り口から私の旅を始めるのだ。